

【研究ノート】

## 富士講のビデオ記録

—記録概要と資料化の問題点について—

友野千鶴子\*

### 目次

1. はじめに	(2)収録内容
2. 富士講と記録収録にいたる経過	(3)編集の経過
(1)富士講略史	(4)編集内容
(2)現代の富士講	5. 問題点と課題
3. 記録対象と体制に関する事項	(1)撮影形式の選択について
(1)対象	(2)指定文化財収録の意義
(2)体制	(3)映像記録の資料論
(3)記録媒体等	(4)音声資料について
4. 記録の経過と内容	(5)編集の時間に関して
(1)収録の経過	6. おわりに

キーワード 富士講 映像 博物館資料 丸藤宮元講 丸嘉講 割菱八行講

### 1. はじめに

本稿は、当館で収録・所蔵する富士講が伝承する行事のビデオ記録資料の概要と、作業経過から感じた当館の記録時の問題点や資料化作業について述べるものである。講は都城3か所の講をあつかった。当該資料は、1986年度よりおこなわれてきた映像音響資料制作の無形資料記録事業の成果品の一つである。

### 2. 富士講と記録収録にいたる経過

#### (1)富士講略史

成層火山である富士山はこみたけ小御岳とあしたかやま愛鷹山の双子火山のうちの小御岳火山、およそ6万年前に小御岳火山のとなりから噴火した古富士火山、そして、約1万年前に小御岳・古富士火山の間

\* 当館学芸員

での第三の噴火で生じた新富士山の3つの火山により現在の姿の基礎が形成された。その後も貞観の噴火をはじめとする大きな噴火をくり返し、人の力では抗しえない火の山として人々を畏怖させた歴史を持つ。また、火の山としての存在に加えて、江戸から眺望のきく秀麗な姿もあり、江戸庶民からとくに信奉される山であった。霊山として信仰を集める著名な山岳の一つである。山の祭神は木花咲耶姫このはなさくやひめ（浅間大菩薩せんげんだいぼさつ）であり、豊作・養蚕の神、また、木花咲耶姫の火中出産の伝説から安産の神とも考えられている。

信仰登山の歴史は古く中世にさかのぼると考えられているが、それは修験の道者たちが中心であった。富士講が形成され最も大勢の人に支持されたのは江戸期に入ってからである。

富士講の講とは「人の集まり」という意味である。富士山を信仰する人の結社をさす。他の信仰的講集団同様、金銭的な元締めである講元、信仰の精神的指導者である先達、その他複数人の世話人など講員から組織され、月々講員の間で金を積み立て、くじ引きでその金をもちいてその年登山する代表者を決める「代参」が、講の通常の登山の形であった。自由に諸国を旅することが禁じられていた時代には庶民の大きな楽しみの一つでもあり、江戸からの富士登山では、登山後、江ノ島、大山などへ参詣し、宴をはって遊んで帰るパターンも存在した。江戸庶民にとって一度は登ってみたい「お山」であり、「お山」に行かないまでも近所に浅間神社を勧請したり、旧暦6月朔日のお山開きの浅間詣でやそれにとまなう市などの賑々しい風習も生んだ。北斎、広重などの絵師にも好んで画題として取り上げられている。

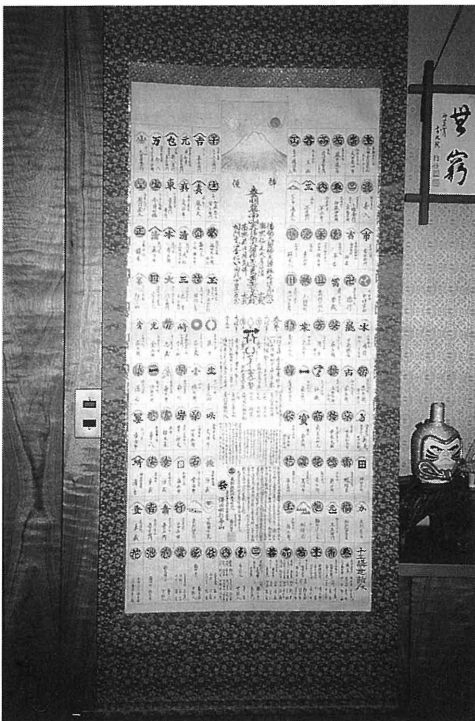


写真1 1990年8月22日 撮影 友野千鶴子

富士講が結社として隆盛を見る前に、その抱え持つ教義・教養の基礎を築いた代表的人物はかくぎょうとうぶつ 角行 藤仏じきぎょうみらく（書行東覚／1541～1646）と食行身禄じきぎょうみらく（1671～1733）の2人である。富士講開祖といわれる角行は、数々の富士講文書に特徴的に見られる異体字や、現在も信者に伝わるオツタエと呼ばれる呪言を考案し、御身抜（オミヌギ）<sup>1)</sup>を信者に与え、富士信仰を教義教養化し庶民に知らしめた。また、いつの時代も新しい宗教は病や困窮にあえぐ人々の支持をえて発達していくが、角行の施すフセギとよばれる呪いや加持祈禱による治病という効験は、現世利益をもとめる人々によく受け入れられたようである。

食行身禄は「富士講中興の祖」といわれ、角行からおおよそ100年後、56億7千万年後に衆生を救うために出現するという弥勒菩薩になぞらえ

た「身禄」の名を名乗った行者である。この身禄が世の「おふりかわり」を願って富士入定（1733年／享保18）をしたことで、江戸の富士信仰は爆発的に広まっていく。身禄の入定行為は、暗い世相<sup>2)</sup>のなか、江戸市民に広がる終末的危機感のなかで生まれた大きな事件であり、それまで組織化まではいたっていなかった富士信仰の急速な集団化を促すものとなった。事実、身禄の直弟子の高田藤四郎は1736年（元文1年）に「身禄同行」を組織したといわれ、これが「江戸八百八講」といわれる沢山の講の先駆けとなる。藤四郎はまた、富士山のミニチュア＝富士塚・第1号の高田富士（1779～1964）を築造し、江戸にいながらにして富士登山の疑似体験を可能にした。この後、江戸を中心に富士塚が盛んにつくられるようになる。

富士講はそれぞれ「丸藤」「丸嘉」「山吉」などの笠印を持ち、それぞれ元講と枝講の本部支部が存在した。都内に確認される長島泰行筆の富士講曼陀羅（1842）（写真1）には江戸の講印は109種が示されている。それぞれに枝講があるわけだから「江戸八百八講」のフレーズにもうなずけるものがある。

## (2)現代の富士講

現在、娯楽の多様化や、その信仰の形の変化、変容にともない、一般に信仰の山として富士山がとらえられることは少なくなりつつある。交通手段の発達や登山用具の普及にもかかわらず、皮肉にも山に登る富士講は減少していつているのである。年々講員は高齢化している。富士山自体もスバルラインの開通によりたやすく登れる山との感覚もあり、スポーツ登山として面白味に欠ける面から「二度登る山ではない」という山岳家たちの言葉もある。自然の脅威を人が克服した時点で、富士山はもはや信仰の山ではありえなくなったのだろうか。

富士講集団のなかでも経済条件の変化などから講金を集める月掛けが廃止され、登山直前の一括集金や信用金庫や旅行会社の利用など、現代的な対処方法が出現した。登山は五合目まで観光バスを仕立てていく形である。大幅に富士登拝にかかる時間が短縮され、比較的たやすく登れる山との感覚もあるようである。富士講と密接な関連を持ち、登山の際の講の定宿であった富士北口<sup>3)</sup>の御師の活動もこれに応じて変化し、廃業や講とのつきあいのない御師も出現している。

また、富士講減少の別の要素として、かつての「先達や講元のご近所が講員となった、顔見知りの世話人に率いられての富士登山」という牧歌的な条件が成立しにくい場所が多くなってきているらしいこともあげられる。

引率旅行という発想では、旅行会社のパッケージ旅行などが豊富に存在し、「富士山よりも面白い場所が沢山ある」状況である。実際、毎年の同行観察の限りでも、その年参加する講員各自が旅行会社のツアーと比較しての長所短所の感想をもらしながら旅をしている。長所としては、講の登山が登山開始地点の五合目付近でツアー客を解散させてしまうに近い登り方をしている旅行社式と比して、世話人が非常に面倒見がよく安全な点、富士講が登山に金をかけてき<sup>4)</sup>ている結果としての各山小屋の親切さなどで、「ありがたい」「私は講につれてきてもらわな

ければ、一生富士山には登れなかった」という感想があった。短所面では「世話人が気がきかない」「山小屋の設備が気に入らない」といったものである。昨夏の登山シーズンの新聞の投書欄にも「富士山の（日本の）山小屋はトイレや布団が汚く衛生的でないと思う」といった意見が掲載されている。登山者の感想としてはそのようなものがあるのだろう。こういった感覚は人によって異なるものだと感じるが、さまざまな登山集団を登山中観察してみたところでは、総体的に「富士登山」に慣れている講の世話人は、登山の足手まといになりがちな初山や弱者を意識し非常に行き届いた配慮をしているし、私が登山した6年の間でも見違えるように山の宿泊設備は改善されている。これらの意見は個人の感情や感覚の差異というよりは、レジャー登山の意識が定着している事実と、講の信仰面よりもレジャー面でのツアーコンダクター的機能がより強く認識されていることからもたらされる不満の表れと考えられよう。

一方引率する側では、「富士山に行く、登る」ということが積極的な魅力とならない上に、連れ歩く側の世話人など役にあたる場合はなおさら厄介な重責といえ、このような面倒な役の受け手の減少の問題も存在する。

講の役員は大勢の講員と対峙できるだけの複数の主観を自己のなかに内在させる必要性があり、判断力や統率力も必要である。実際、講の先達などはさまざまな意味で人望がある者が多いといいい、宮元講社の現先達も保護士や町内会の役員等、ある種ボランティア的な役職に複数ついている。そのような資質を持っているということや持つための訓練は、社会生活一般のなかで当人にとっても有益といえる。が、個人主義的発想で見ると、一見何の得にもなりそうにない煩雑な事柄に自ら身を投じようという人達は少なくなっている。加えて総じて都内では、居住者の変化要員が大きいという理由もある。

いずれにせよ、「講」という形で富士の信仰を維持するには大変むずかしい状況があり、記録収録にいたる大きな要因となったものである。

### 3. 記録対象と体制に関する事項

#### (1)対象

江戸を代表するほどの数が存在した信仰的講集団という点と、その伝承する行事形態が雑多でバラエティに富むということが特徴ともいえるため、都内に現存する講をいくつか通年かけて追うこととした。時間をかけて追うことにより何故人が講に集うのかうかがい知ることができると考えた。しかし、記録候補としては長年あげられてきた経緯があったが、館として具体的な調査はあまりなされていなかったため、高田藤四郎の直系である丸藤宮元講社以外の対象についての検討材料が少なかった。このため、富士信仰に関して長く研究を続けている東京都文化財保護審議会委員・平野榮次氏を訪ね協力を依頼、講の選定や収録に関してのアドバイスをもらうこととした。

## 富士講のビデオ記録

結果、地域的バランスとなるべく異なる講派をとらえることにも配慮の上で、都内に現存する富士講社で89年度時点で比較的活発に活動をしている講<sup>10)</sup>を対象にした。

1989年度

①丸藤宮元講社（新宿区）

②丸嘉講武州田無組中里講社（清瀬市）

1990年度

③割菱八行講社（江戸川区）

①丸藤宮元講社 身祿と高田藤四郎の直系の講社であり、高田富士を祀っていた講の一つである。その歴史自体「江戸の富士講」を代表する。昭和40年代ころには交通ルートの発達もあり毎年100名ほどの講員を率いて富士登山をしている。そのころの講の行事や先達に関する記録は〔岩科 1983〕に詳しい。毎月先達宅の宮元講社のゴシンゼン（ご神前）に世話人が集まり、オツタエ<sup>11)</sup>を唱えるツキオガミ（月拝み）をおこなっている。

②丸嘉講社 江戸市外の現在の東京市部（東久留米、保谷、田無、清瀬など）を中心に一大勢力を持つ講である。富士登山など大きな行事は田無組全体でおこなう。なかでも中里講社は武蔵野部の赤土で形成された地域特徴をよく示す中里富士（1825築造）を祀っておりこの塚は都指定有形民俗文化財となっている。また、毎年9月1日に中里富士でおこなわれる「火の花まつり」が都無形民俗文化財に指定されている。火の花まつりは富士吉田市の「火祭り」が伝わったという伝承がある。丸嘉講下里講社も小規模な火の花まつりをおこなっているが、都下の富士講でこの規模の火祭りを伝えている講は珍しい。彼らはまた、江戸市中の講が「田舎講社」と呼ぶ地域の講であり、その差異も見られるかという期待もあった。

③割菱八行講 記録した講のなかではもっとも新しい講と思われる。<sup>12)</sup>山梨県都留郡が発祥という伝承等あるが都内への伝来の詳細は現時点では不明である。江戸川区界隈は海路を通じて富士のボク石（溶岩）を入手しやすい立地もあり、東京の富士塚のおよそ3分の2が集中している。活発に富士塚が築造された地域のため1講とりあげたいという希望があった。この講は下鎌田の豊田神社内に「下鎌田の富士山（1916築造／区登録有形民俗文化財）」と呼ばれる富士塚を祀っており、枝講として今井割菱八行講、新堀割菱八行講がある。<sup>13)</sup>記録時の八行講は講としての登山をおこなわなくなっており、3講合同で3年積立の掛け金で吉田火祭り参詣を実施し講の周期としている。また、正月の近隣へのお札配りやオツタエを唱えるオヒナミといわれる月々のまつりも毎月ヤドをかえておこなうなど、他の2講には見られない、あるいは「とうの昔にやめてしまった」と述べているような事例を伝承していた。記録は1989年に通年で3講の並行記録がむずかしいことと、月掛けの完了が1990年にあたることから1990年度におこなった。

## (2)体制

### ①収録

記録収録の記録の構成については館学芸員がおこない、収録・編集技術については株式会社民族文化映像研究所に依頼した。また、当初、同じ富士講についての記録のため館側の担当者を散らさないほうが望ましい旨意見もあったが、山開きなどの行事自体が複数講同日に持たれるため、同一担当者が担当しての複数箇所の収録実施はむずかしい状況があった。このため、⑥の丸嘉講社に関しては、収録前の概要把握と構成作成、収録技術の仕様に関する事項までを友野千鶴子がおこない、収録記録作業開始後の現地での並行調査と収録内容の調整作業は粟屋朋子を中心に進めた。①②③ともに、収録の正式な協力依頼にあたる調査日、大がかりな撮影や記録収録の中心となるような行事に関しては、粟屋、友野両名で実見、調整するようにつとめた。

#### ①構成／友野千鶴子

製作指導／平野榮次

撮影／澤幡正範（伊藤碩男・小原信之・松村雅廣）

VE・音声／柴崎映子（青原慧水・天田裕之）

登山荷物運搬（照明）／林田鉄也・福井達人

照明／川井田博幸

編集（仮・本）／那須正尚

演出／伊藤碩男

演出助手／李永亮・七海由美子

製作／小泉修吉・姫田忠義

#### ②構成／粟屋朋子（友野千鶴子）

製作指導／平野榮次

撮影／小原信之（澤幡正範・伊藤碩男）

VE・音声／青原慧水（柴崎映子・星加浩二・天田裕之・福留憲一）

登山荷物運搬／井上裕之

編集（仮・本）／那須正尚

演出／小泉修吉

製作／姫田忠義

#### ③構成／友野千鶴子

製作指導／平野榮次

撮影／澤幡正範（小原信之）

VE・音声／柴崎映子（天田裕之・青原慧水・吉野奈保子）

編集（仮・本）／那須正尚

演出／伊藤碩男

製作／小泉修吉・姫田忠義<sup>14)</sup>

## ②編集

編集に関しては収録者と同じスタッフに依頼する形とした。それぞれ製作、演出、編集は上記と同メンバーである。館での公開視聴のための編集は1992年度の実施となった。年月を経て館の体制変更の影響があり、⑥の丸嘉講社に関して栗屋から友野へ担当替えがあった。

編集ではMA等のスタジオのスタッフの他に作品中に強く出現する関与者としてナレーターがいる。館ではナレーター解説を採用するケースが多かった。収録事例を丁寧に提示し雰囲気も含めて知ってもらいたいという希望もあったので、作品の性格を左右するような目立ちすぎる個性の者は避けた旨希望した。記録ものの編集では、この意味でナレーターは局アナの声や話し方の者が多くなった。製作側から提示のデモテープを検討し、中里雅子を採用した。個々は独立しているのだが、3講で編集に含める内容を調整した3部作的意味合いがあるので3作とも同じナレーター使用となった。

## (3)記録媒体等

### ①収録媒体

記録収録については館で採択してきたそれまでの流れを尊重した使用媒体・保管方法を取り、放送用ビデオ（βカム）収録とした。映像記録としては、収録素材（βカム）、保管用素材（1インチ）、視聴用素材（VHS）の3種を同収録内容について作成し、その上で仮編集テープをVHSとベータビデオで作成した（図1）。これらの素材に共通してアドレスシート、仮編集のエディットシート、収録スタッフ・機材記録も保管した。収録にもちいた機器は（表1）である。この他に割菱八行講に関しては個々の撮影日の業務日誌を収録者からも提出してもらった。<sup>15)</sup>

### ②編集媒体

作品編集の媒体は館で公開時にもちいる機材がLDプレイヤーとなることと、使用時の劣化への耐久度も考慮しLDを成果品とした。編集の媒体フローは（図2）参照。

## 4. 記録の経過と内容

ここでは、記録作業のなかの収録と編集に関して記す。「記録」というものは文字であれ画像であれ環境から切りとってくる時点で—博物館やある学問分野が共通に切りとりがちなる事象があるにしても—携わった者の視点が存在するはずなので、収録と編集作業を理念的に切り離し

図1 収録媒体のフロー

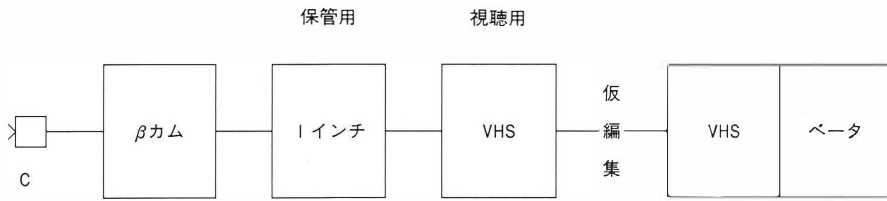


図2 編集媒体のフロー

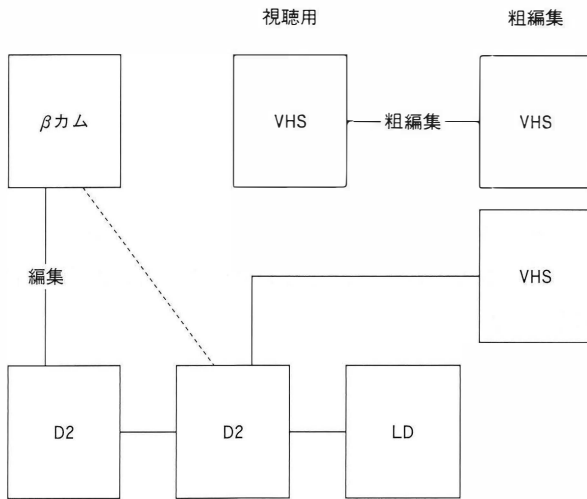


表1 おもな収録機材 (3講をまとめたもの)

カメラ	VTR	音声	その他(仮編集)
IKEGAMI HL-95D	SONY BVV-5	SONY ECM 44SF	VICTOR
IKEGAMI HL-79E	SONY BVW-35	NATIONAL RAMSA	AV-MI50S
SONY BVP-5		WX-2155	BR-7700
		WX-2255	BR-8600
		MKH416T	RM-86
		SIGMA SS-403	



て考えるべきではないからである。また、編集内容については、編集に至って感じた点や注意点等を中心に記した。ただし、これらのことから、実際それに足りる画像が撮れていない部分があるなどの理由から各作品においてすべてクリアできているとは思わない。文章ではなく原資料(LD)を必ず参照してもらいたい。今回紙面などの都合もあって編集作品に則した詳細な書誌事項の用意ができなかったため、実際の編集内容はLDを視聴するほうが理解がたやすい。

### (1)収録の経過

1989年度から1990年度にかけての収録間際から収録に並行して調査・収録調整に入っている。個々の収録その他の記録作業にかかわる動きは(表2)のとおりである。短絡的に見て収録や編集と連動しないと考えられがちな調査は実施許可が館側からおりなかった。収録内容の検証のためにその後も追跡調査をしているが、その他の有形資料の調査と並行して補充をおこなったり、各担当者の個人的立場での調査把握となるため日程の詳細は不明である。が、このことからわかるように、館の「記録」し編集していこうという発想は開館が近づくにつれ、「多少詳しい教育普及用作品としての映像媒体のみ」を優先的に確保すればよしとする傾向が強くなっていった。初期段階では、やり方のよしあしは別としても記録収録した生素材を収蔵しいろいろ利用していきたいという認識があって記録事業が始まっていたので、方針転換的に補充調査が打ち切られるのは各収録対象一様に困った事態だった。富士講以前に撮った対象のなかには記録趣旨の解釈としてかなり実験的に撮られたものや調査が足りないものもあって、この要請に応えるには相応の追加収録をせねばならないものも出た。富士講については多少の目配りをしていたので追録はおこなわなかったが、時間を経ての追録ができないケースも生じたので、<sup>16)</sup> 早期の調整がおこなわれなかったのは残念である。

「多少詳しい教育普及用作品」という方法での「編集」意識はオーソドックスであるが、反面、素材を獲得するとこと足りた感覚に陥り、素材の内容を考慮せずにすでに提言されている定式的なセオリーに無理矢理あてはめたストーリーで編集加工する危険性や、こと足りた充足感から検証データの収集をともしれば軽視しがちな欠点がある。

収録した当該年の記録ということだけではなく、富士信仰についての文化財教育教材的な期待に応じるには、教材でいう正調・富士信仰のイメージとどのくらい各講同じなのか違っているのか、なるべく多く自分なりに見ておかねばと感じた。もちろん、異分子である私が同席すると講の側では「ええ格好」をする意識は働いている。それでもカメラが入る時よりも緊張感は少ない。「撮影の時はやらなかったでしょ？友野さんにはまだ聞かせてないから是非やってよ」との余芸もずいぶん披露してもらった。実際、「富士信仰の講」といっても集まる人には陸会の感覚が強く、「若い時分は何が面白かったって、講に来て猥談を皆でするのが一番楽しかった」という感想など、優等生的な宮元講の構成員からも複数聞かれた。それは楽しい思い出の

表 2-1 丸藤宮元講社収録スケジュール〔年月日／内容／場所〕

\*90年7月からは補充収録

89/4/1	資料調査	新宿歴史博物館	89/6/30	開山前夜祭調査・収録	富士吉田市
4/5	資料調査・借用	江戸川区 郷土資料室	7/1	七富士マイリ調査・収録	都内
4/9	製作指導者打合せ	豊島区宣教師館	7/4	オッタエ唱和(月拝み) 収録・調査	早稲田鶴巻町
4/18	資料調査・返却	江戸川区 郷土資料室		オユルシ収録打合せ、 講所蔵資料調査	
4/29	丸藤宮元講社先達調査協 力依頼	早稲田鶴巻町	7/6	資料返却	早稲田鶴巻町
5/1	製作指導者打合せ	日本大学医学部	7/14	水稲荷調査	西早稲田
5/8	収録委託先打ち合せ	江戸博 (資料収集室)		浅沼工務店・ 田島嘉男宅ヂマツリ収録礼	早稲田鶴巻町
5/10	資料調査	NHK放送ライ ブラリ	7/17	ラッシュ検討・打合せ	民映研
5/11	丸藤宮元講社先達収録打 合せ	早稲田鶴巻町	7/25	板橋区所蔵資料調査	板橋区若葉小
5/12	製作指導者打合せ・ 指導依頼	日本大学医学部	7/26	行衣版木刷調査・収録	早稲田鶴巻町
5/15	展示部門富士信仰監修者 調整(庶民の旅と祈り)	江戸博	7/29	資料調査、登山打合せ	早稲田鶴巻町
5/19	宮元講月拝み(大祭)調査	早稲田鶴巻町	8/2	登山収録打合せ	民映研
	挨拶、打合せ	岩科小一郎宅		立ち拝み調査・収録	早稲田鶴巻町
5/26	製作指導者打合せ	日本大学医学部	8/3	大黒屋スアマ準備 調査・収録	早稲田鶴巻町
5/29	宮元講社 調査・収録日程調整	早稲田鶴巻町	8/4~8/6	富士登山調査・収録	早稲田鶴巻町~ 富士吉田市
6/1	先達ムシヨケ調査・収録	早稲田鶴巻町	8/10	お礼拝み調査・収録	早稲田鶴巻町
6/4	月拝み調査	早稲田鶴巻町	8/19	吉田火祭り収録打合せ	早稲田鶴巻町
6/7、8	収録協力依頼・調査	富士吉田市	8/22	テープ仮受領	江戸博
6/11	先達入梅呪い調査・収録	早稲田鶴巻町	8/23	ラッシュ検討、吉田火祭り 打合せ	民映研
6/15	収録協力打合せ・事務連絡	新宿歴史博物館	8/25	女人天上収録・調査、市教育委 員会、県吉田林務事務所挨拶	富士吉田市
6/16	宮元講資料調査	早稲田鶴巻町		胎内神社奉納資料調査・収録	河口湖町
	事務連絡・打合せ	民族文化映像研 究所		人穴墓石群調査	富士宮市
6/26	先達ヂマツリ準備調査・ ナナフシマイリおよび開山前夜 祭収録打合せ	早稲田鶴巻町	8/26	人穴墓石群収録	富士宮市
6/28	ヂマツリ調査・収録	早稲田鶴巻町		吉田火祭り調査・収録	富士吉田市

富士講のビデオ記録

89/ 8 /26	吉田火祭り調査・収録	富士吉田市	90/ 4 /10	仮編試写会打合せ	新宿歴史博物館
8 /27	火祭り帰路、 火伏せ調査・収録	富士吉田～ 鶴巻町	4 /18	館内試写	江戸博
9 /12	大黒屋協力御礼	早稲田鶴巻町	5 / 8	仮編試写会	富士吉田市
9 /18	大国屋解説収録、 浅間神社資料調査	早稲田鶴巻町	5 /12	仮編試写会	新宿歴史博物館
9 /27	資料調査	大田区郷土博物館	90/ 7 / 4	宮元講収録挨拶・打合せ	早稲田鶴巻町
9 /28	資料調査	早稲田鶴巻町	7 /15	宮元講収録打合せ	早稲田鶴巻町
10/20	先達宅資料収録	早稲田鶴巻町	7 /18	収録打合せ	民映研
11/ 4	収録打合せ、資料借用	早稲田鶴巻町	7 /29	講元登山打合せ、事務連絡	早稲田鶴巻町
11/29	江戸川富士講、 割菱八行講調査	江戸川区	8 / 1	登山収録打合せ	江戸博
12/ 5	資料返却、 収録打合せ(先達)	早稲田鶴巻町	8 / 2	立ち拝み調査・ 登山収録挨拶	早稲田鶴巻町
12/ 9	収録打合せ (講元代行／総務)	早稲田鶴巻町	8 /4～6	富士講オハチマーリ 調査・収録	早稲田鶴巻町～ 富士吉田市
12/14	収録打合せ	民映研	8/13～15	富士山北口1～5合登山道 調査・収録(収録は14、15)	富士吉田市
12/18	テープ仮受領	江戸博	8 /17	ラッシュ検討	民映研
12/22	冬至穴八幡、冬至拝み収録・ 調査 成子富士、東大久保富 士収録	早稲田鶴巻町 他	8 /22	宮元講写真資料調査・借用	早稲田鶴巻町
12/30	宮元講神前正月準備調査・ 収録、音羽富士、江古田富士 収録	早稲田鶴巻町 他	9 /11	資料返却	早稲田鶴巻町
90/ 1 /15	正月拝み調査・収録	早稲田鶴巻町	11/30	資料調査	新宿歴史博物館
2 / 3	市教委・郷土館挨拶、 節分祭り収録・調査	富士吉田市	12/25	資料調査、事務連絡(先達)	早稲田鶴巻町
2/10	中里富士、長崎富士、千駄 ヶ谷富士収録	都内	91/ 1 /18	資料調査(先達)	早稲田鶴巻町
2 /16	試写会打合せ	新宿歴史博物館			
3 / 2	事務連絡	民映研			
3 / 7	宮元講謝礼文書処理	早稲田鶴巻町			
3 /22	仮編打合せ	民映研			
3 /24	仮編打合せ	民映研			
4 / 4	仮編試写会打合せ	早稲田鶴巻町			

表 2-2 割菱八行講収録スケジュール

89/11/29	江戸川富士講、 割菱八行講調査	江戸川区	11/5	収録打合せ	北区教育委員会
90/4/6	収録打合せ・資料調査	江戸川区 郷土資料室	11/9	ラッシュ検討 (富士講3講)	江戸博
4/9	八行講収録打合せ (先達・調査)	先達宅	11/15	今井割菱八行講資料調査	今井先達宅
4/18	製作指導者打合せ、 協力依頼	江戸東京博物館	11/20	ラッシュ検討 (富士講3講)	江戸博
4/26	製作指導者打合せ、 協力依頼	江戸博	11/22	今井割菱八行講資料収録	今井先達宅
5/13	江戸川区 教育委員会収録事務処理	新宿歴史博物館		お札づくり調査・収録	先達宅
	収録委託先事務連絡	民族文化 映像研究所	11/30	資料調査	新宿歴史博物館
5/18	収録打合せ	江戸博	12/7	資料調査	板橋区
5/25	収録委託先事務打合せ	江戸博	12/11	収録打合せ	北区富士三峯講
5/26	オヒナミ祭調査、収録挨拶	八行講世話人宅	12/12	事務連絡	江戸川区 郷土資料室
6/1	植木市調査・収録	浅草	12/21	資料調査	国立公文書館
6/12	ナナセンゲンマーリ調査	江戸川区、 浦安市		製作指導者資料借用	雄山閣
6/19	オヒナミ祭収録打合せ	八行講世話人宅	12/30	正月準備調査・収録、 富士塚収録	先達宅、 豊田神社
6/20	オヒナミ祭収録打合せ	民映研		富士塚調査・収録	江戸川区、 浦安市
6/23	資料収録	江戸博	91/1/4	不動の滝収録	板橋区
	オヒナミ祭調査・ オツタエ収録	八行講世話人宅		八行講春祈禱調査・収録	江戸川区
6/30	山開き準備調査・収録	豊田神社		資料収録	江戸博
	富士講碑調査・収録	大田区安養寺	1/21	資料収録	国立公文書館
7/1	ナナセンゲンマーリ 調査・収録	江戸川区、 浦安市		資料収録	北区富士三峯講
7/22	オヒナミ祭、吉田火祭り打 合せ 調査・収録	八行講講元宅	1/23	富士塚調査・収録	浦安市
8/17	ラッシュ検討	民映研	2/12	仮編打合せ	民映研
8/26、27	吉田火祭り参詣調査・収録	江戸川区～ 富士吉田市	2/19	仮編打合せ	民映研
8/28	収録資料搬出	館借用倉庫	2/28	仮編打合せ	江戸博
8/29	資料収録	江戸博	3/28	館内試写	江戸博
9/15	オヒナミ祭、 火祭り感想調査・収録	先達宅	4/23	関係者試写会、 謝礼事務処理	江戸川区
9/21	資料調査・収録	富士宮市	5/27	関係者試写会	富士吉田市
10/5	収録打合せ	新宿区 文化センター	*丸嘉講のスケジュールは直接の担当外のため、詳細は不明なので省略する。		

ようである。

追跡調査は講の多面性を知る成果はあり、このような余興も撮れば面白かったと感じた。が、教材要求自体は、富士信仰と富士講のヴィジュアルな例示データがとりにくくなっているので有意義なことと思う。

各講へのその後の確認調査来訪はそれぞれスパンが異なる。丸藤宮元講社については決まった日時で毎年登山などをおこなっているため調査スケジュールを立てやすいこともあり、1989年度以降、1993年をのぞいて調査・あるいは傍観者として登山にも随行、訪問した。記録収録時に時間的に気づかなかった点や、カメラの影響もあり見られなかった行為を把握することができ、結果、収録行為に関しての問題点の認識や対象に関しての総体的イメージを構築するのに役立った。<sup>17)</sup>

## (2)収録内容

予定では、各講に関して(表4)を大枠としてとらえることとし、その個々について予め細項目を立てる方が望ましい場合は事前に細項目を打ち合わせて目安とした。収録日数とテープの予定は(表3)の形で設定した。収録日とテープは天候や対象の都合の変化のため、調査収録経過の現実の実数はかわっている。内容についても枠組・細項目ともに予定内容の追加や変更(撮れなかった/撮らなかった)が生じた。1年の行事内容についてほぼ順を追って編集したビデオを作成した。これは、ナレーションや文字スーパー等がまったく入っていない粗編集的なものである。担当学芸員の口頭解説を交えながら、関係者宛中間報告をかねた試写会を開催した。

また、1990年度の割菱八行講の収録時に丸嘉講社については講員の所蔵資料等の補充撮影、丸藤講については前年雨天中止となった頂上での先達を含めてのおハチマリー(お鉢まわり)を収録した。信仰的講の富士登拝の定式が頂上でのオハチ(=火口)をめぐる行の実行であり、行の認識がなくても登山者にとっておハチマリーは一種の憧れであり到達感を満たすものである。また、前年病み上がりの先達は自重し講を副先達に預けて中腹までの登山にとどまっていた。その慎重さが「病人や女子供も率いて安全に上まで連れていくのが富士講の名先達」という姿を証明しているのだが、この収録素材をもちいた教材的な編集要請がある場合には、先達の引率が欠ける登山では理解されにくいと考えたからである。

表3 収録日とテープ

	予 定		実施結果	
	日	本数	日	本数
丸藤講	19日	51本	20日	57本
丸嘉講	15日	48本	20日	54本
割菱講	20日	60本	21日	54本

- \* ビデオはβカム20分テープ
- \* 割菱講の収録日のうち、5日(丸藤)・1日(丸嘉)補足収録分。
- \* 割菱講の実施本数のうち7本は丸藤講、1本は丸嘉講の補足収録分。
- \* 丸嘉講の収録経過は筆者が読み取れるメモがないため、VTRより。

表 4 収録予定内容概略

	6月	7月	8月	10月	
丸藤宮元講社	<ul style="list-style-type: none"> <li>先達 ムシフウジ 6/1 毎日のオツメ 緑のおじさん</li> <li>北口本宮富士浅間神社 開山前夜祭 先達出立の様子 先達茅の輪くぐり 神事 先達登山門おみちびらき 先達 御師その他への挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ナナフジマイリ 高田藤四郎墓参 高田藤四郎(2代)墓参 駒込富士参詣 千住富士参詣 下谷坂本富士参詣 十条富士参詣 講と各富士塚、迎える講の様子</li> <li>塚の登り方、マネギ</li> <li>先達 登山のための潔斎</li> <li>講 登山諸準備 議員の勧誘</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立ち拝み お礼拝み 写真交換 お札配り、フセギ</li> <li>講 荷物など打合せ、とりまとめ 先達 焚符など朝の視ぎからの準備 お焚き上げ(オツタエ) 個々の呪具 立ち拝み独特の拝み方</li> <li>富士登山 登り方(列の順) 出発朝の支度(切火) 御師大國屋、装束替え・御師とのやりとり 各社参詣(お札、オツタエ、奉納物)、旧登山道</li> <li>山小屋(祝儀等やりとり、祭神、宿泊、講奉納物など) 山の名所、八合目ご来光、火口拝み、オハチマーリ、下山の様子、胎内参詣、下山祝い、遊山帰路</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>月拝み 4日の講の様子 お焚き上げ オツタエすべて 焚き符、お茶</li> <li>講所蔵資料(道具、碑)</li> <li>23区内富士塚(江戸期築造)</li> <li>館資料</li> </ul>	
	丸嘉講武州田無組中里講社	<ul style="list-style-type: none"> <li>1日 中里富士お山開き 中里富士&lt;指定&gt; お山開きの講の動き(草刈り、お神酒宴) 講元・先達指導挨拶</li> <li>北口本宮富士浅間神社 開山前夜祭 講の参加の様子 茅の輪くぐり 神事 講登山門おみちびらき</li> <li>麦畑(タイマツ藁)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講金集め、登山準備</li> <li>富士登山(丸嘉講田無組) 中里富士参詣 御師上文司、装束替え・奉納額資料・御師とのやりとり 各社参詣(浅間神社—御師のお祓い、お札) 山小屋宿泊の様子 登り方(夜行登山) 火口拝み 下山の様子、下山拝み、帰路の様子、お札配り、フセギ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>下山日待ち</li> <li>塚の火の花まつり準備</li> <li>吉田火祭り参詣 祭礼の様子 オオタイマツ拝み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月 火の花まつり&lt;指定&gt; 講の動き一連、タイマツ 婦人会(物日食事) 拝み(オツタエ) かなづけ 会計(講元)</li> </ul>
割菱八行講社	<ul style="list-style-type: none"> <li>下鎌田富士お山開き準備 先達シメ作り 講員がおこなう塚修理 下鎌田富士&lt;登録&gt; 豊田神社</li> <li>先達 行衣の版押し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>下鎌田富士お山開き 講の飾りつけ 先達神事、オツタエ</li> <li>ナナセンゲンマイリ 下鎌田富士参詣 今井富士参詣 浦安市堀江の富士塚参詣 浦安市猫実の富士塚参詣 葛飾区ヤマノムラ富士塚参詣 松戸市小山浅間神社参詣 篠崎浅間神社参詣(幟祭り) 上今井割菱八行講・新堀割菱八行講とのつきあい、マネキ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>オヒナミ祭 拝みダンスのヤド巡回 屋敷の配置 オツタエ唱和すべて ヤドの裏方の様子・女性 オツタエすべて オヒナミの拝み づつ拝み 講元・先達役割 講所蔵資料・道具</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月 吉田火祭り参詣 講の動き一連 講の満期、準備打合せ(オヒナミ) 北口本宮富士浅間神社・小御嶽神社参詣(お札、オツタエ) 御師不在</li> <li>お札配り、火祭り会計報告(オヒナミ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>丸嘉講 中里富士全景</li> <li>資料 富士参詣曼茶羅 絵本江戸土産、江戸名所図会 富士山道知留辺 富士講印曼陀羅</li> </ul>
				<ul style="list-style-type: none"> <li>1989年分補充 丸藤講 登山(オハチ、帰路 遊山) 1-5 合目旧道、お中道</li> </ul>	

富士講のビデオ記録

11月	12月	1月	2月
	<ul style="list-style-type: none"> <li>冬至拝み お焚きあげ、 オツタエ、 冬至の焚き符 忘年会、事務連絡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>正月大祭 大祭準備 大祭の講の様子 (新年会、お焚き上 げ、オツタエ、大祭 の食) 先達 1990年の登 山日を占う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>北口本宮富士浅間神 社節分祭 豆まきへの講の参加 御師宅での休憩 (御師所蔵資料)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>星祭り 生活改善センターで の講日待ちの様子 お焚きあげ、拝み(オ ツタエ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>初マイリ(北口本宮 富士浅間神社) 御師立ち寄りの様子 初詣</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>春祈禱準備 先達 お礼つくり 呪い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>下鎌田富士先達正月 準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>講 春祈禱(下鎌田、 今井、新堀) オツタエ唱和 お札配布 講のへのご祝儀 正月の富士の床飾り (不祝儀を避ける)</li> </ul>	

**(3)編集の経過**

収録後2年が経過した1992年度に記録したテープを一般公開用に編集した。  
編集に関する動きは(表5)参照。

**(4)編集内容**

なぜ講で毎年山へ向かうのか?かつては御師の盛んな勧誘活動などの要因が存在したであろうが、現講員の講加入の動機は、たとえば宮元講では「先達に魅かれた」「近所」「叔父さん(親)が入っていた(=理屈ではない)」「山に行きたかった」等々ある。「ここには、気持ちのいい人が多いから」という自己の所属する複数のサークルの好みの一つとしての意見もある。参加し世間話をして気分転換をはかることなどが生活の活力に通じるということは当然考えられる。しかし、調査観察した限りでは、信仰的講行事をくり返しおこなうその理由を問うても「そこに山があるから」としかいいようがないものであった。「ことば」だけから汲みとれるものではないけれども、実際、テレビ局の取材や学生の調査質問に対してそのように答える先達や世話人の姿をしばしば目にしている。この返答には調査者に対する皮肉をこめているきらいもあるのだが、確かに、行くこと自体、皆で結束して集まること自体に意味があるとしかいいようがない一面がある。

しかし、「山に登る行」との認識が多少ある先達・世話人と一般の講員では、富士山での「お山」の気候「お山」の姿などを話す(褒め讃える)口調の丁寧さや感激の表現、態度に明らかに差異あることも事実である。そのためか、一慣れの問題や選択の余地もないせいもあるが一如

表5-1 「富士信仰と富士講」編集スケジュール [年月日/内容/場所]

92/3/22	宮元講編集打合せ、挨拶(先達)	早稲田鶴巻町	8/10	資料調査	早稲田鶴巻町
4/8	編集打合せ、事務連絡	新宿歴史博物館	8/11	編集打合せ、対象宛粗編集PV 粗編集PV、ナレーション検討	江戸博
4/29	制作指導者打合せ、協力依頼	江戸東京博物館			
5/15	宮元講編集協力依頼、調査	早稲田鶴巻町	8/21	テロップ ナレーション検討	民映研
5/20	編集打合せ	江戸博	8/25	テロップ フリップチェック	民映研
5/21	編集事務連絡	新宿歴史博物館	8/27	オンライン編集	東京TVセンター
6/26	編集打合せ	江戸博	8/31	MA	東京TVセンター
7/14	粗編集PV	江戸博	10/23	納品チェック	江戸博
7/18	B・B調整確認	たくみ映画社	10/29	館内試写	江戸博
8/2	編集打合せ(先達)	早稲田鶴巻町	11/26	事務連絡、終了挨拶、関係者試写会	富士吉田市郷土館 他
8/4 ~8/6	資料調査、編集打合せ	早稲田鶴巻町 ~富士吉田市	11/29	関係者試写会 謝礼事務処理	新宿博物館



富士講のビデオ記録

表 5-2 「武蔵野の富士講」 編集スケジュール

92/4/29	製作指導者打合せ	江戸博	8/25	フリップチェック	民映研
5/8	資料調査、資料借用	東久留米市役所	8/31	テロップチェック	東京TVセンター
5/12	資料調査、資料返却	東久留米市役所	9/1	火の花まつり調査	清瀬市中里
5/18	丸嘉講中里講社編集挨拶	講元宅	9/3	粗編集PV フリップチェック	江戸博
5/20	編集打合せ	江戸博	9/9	オンライン編集	東京TVセンター
7/14	編集打合せ	江戸博	9/10	MA	東京TVセンター
7/27	粗編集PV、謝礼事務処理	民映研	10/23	納品チェック	江戸博
8/5	編集打合せ(御師)	富士吉田市	10/29	館内試写	江戸博
7/18	B・B調整確認	たくみ映画社	11/26	事務連絡、終了挨拶、 関係者試写会	富士吉田市郷土館 他
8/11	粗編集PV ナレーション検討	江戸博	12/5	関係者試写会 謝礼事務処理	清瀬市郷土博物館
8/21	編集打合せ	講元宅			
	編集打合せ	民映研			

表 5-3 「江戸川区の富士講」 編集スケジュール

92/4/29	編集打合せ	江戸博	12/12	納品チェック	江戸博
8/24	編集事務連絡	江戸川区 郷土資料室	93/1/8	館内試写	江戸博
8/31	製作指導者打合せ、 協力依頼	東京TVセンター	1/20	関係者試写会 謝礼事務処理	江戸川区
9/3	八行講編集協力依頼 (先達)	先達宅 元講元宅	6/17	関係者試写会	富士吉田市
9/17	編集打合せ	江戸博			
10/12	粗編集PV	江戸博			
10/23	フリップ打合せ	江戸博			
11/5	粗編集PV ナレーション検討	江戸博			
11/11	編集打合せ 対象宛粗編集PV	江戸博			
11/13	オンライン編集	東京TVセンター			
11/19	MA	東京TVセンター			

何に濡れようが寒かろうがまずかろうが不平不満も非常に少ない。これらは単に自然への謙虚な姿、感激、感動という言葉で置き換えられるものかも知れない。が、山でのこの実体験と皆で普段オツタエを通じて富士山を讃えたり、登山に必ず付随する火口拝みなどに毎年繰り返して参加することは、「富士山の神々しい印象」を相互に増幅するものである。講員のなかには身祿の教理云々を勉強し講釈する者もある。が、それとは別の次元で「参加するありがたさ」のイメージを、とにかく「やることだから」やってくるなかで構築していつている部分も大きいようである。収録年に観光的に登山に参加していた女性が、毎年の月拝みや登山の参加を6年間ほど経るうちに、いっばしに「お山」を皆で登る素晴らしさ（「おかげさまで登れた」）、「お山」自体の素晴らしさ（「登れてありがたい」「神様のようなお山」）を語る姿が見られ、伝承というのとはかようなものかと感心したことがある。だから、「お山」があるので登るのである。

登山をやめた八行講でも山行の経験がない者が、火祭り参詣の際ふもとから見る山の姿の美しさや伝え聞く先代の登山の談話などをまるで自分が登ったかのように語る。主語なしに語るので本人の体験かと思うと違う場合がしばしばある。登った側の私としては当人が本当に登山したことがないとは考えられない話しぶり、私にはこうはできまいとその度驚ろかさされる。なるべく身近な疑似体験からありがたいお山のイメージと講が「やっていること」をつなぎあわせて、逆に「集うこと」の意味を説明してくれる。遠方からながめるだけでも富士山を崇拝する講員である。富士講の存在は富士山に見える範囲〔岩科1983 p.278〕といわれるような富士山の吸引力のなかに彼らがまだ立脚しているのは確かである。

しかし現在、東京から富士山の姿を眺むことはむずかしくなり、わざわざ富士やすそ野に出向く機会も減っている。人が富士の写真やTVなどの映像を見て同様な印象を持つとはにわかに思えないので、今後どんな形で展開していくのだろうか。「富士は日本一の山」だからそんな心配は無用かも知れないが興味のあるところである。

しかし、行事をとり巻く環境と自己の意識のバランスが崩れた時点では「やることだからやる」ことからくる「義務感」だけで行事をおこなうケースが出てくることは、富士講以外の伝承と比較しても明らかだろう。記録した各講は、富士山に対する憧れや富士山を核として集うことの楽しさを感じているようだが、それでも講のある部分については義務的な意識がはたらく時がある。このため行事にカメラが入ることで、信仰を汚す云々というような大義名分とは異なる部分で彼らの持つ義務感を必要以上に刺激する場合がありますし<sup>20)</sup> 申し訳なく感じることもあった。<sup>21)</sup>

以上の状況もあり、富士信仰や富士講の歴史について一般的にいわれている解説を交えるとしても、各講の結束の契機となる個別の行事の経過をなるべく丁寧に順を追って視覚的に提示することから講の意味を考えてもらうことを基本とした。また、3講とも離れた場所に位置するため、それだけとりあげると直接富士信仰にかかわらないと思われがちなそれぞれの地域的特色を示す発言や景観、行事食などもなるべく含めることとした。各内容を簡単に示したのが

(表6)である。

また、ビデオに含まれる音資料の点で、毎月集まってオツタエを皆で唱えている宮元講と割菱八行講についてはオツタエ自体が地元での集いの機会をつくっているといえるため、編集作品中に唱えられたオツタエを長く聞かせる部分を設けた。

●「富士信仰と富士講－丸藤宮元講社」

(43分47秒)

富士信仰の歴史と講の成立についての解説は、関係有形資料の映像とともにナレーションで補う形でこの講に中心的に含めて編集した。教材的に富士信仰の歴史や富士登拝の形式をきちんと押さえるように努めた。このため、とくにオハチマーリを含めた富士登山は1989・90年双方の映像をもちいる形でかなり教材的意図をもって編集している。

その他の特徴としては、現在の先達の井田清重はいわゆる信仰面での行登山や富士講の先達という立場に関して強く意識している人物であるという点に注目した。食事をあまりとらない形の行登山や、無償であるが講員に請われれば守り札を施したりする。先達自宅で毎月おこなわれる焚き符の焚き上げ行為を含めたオツタエの唱和（ツキオガミ）など、江戸幕府がしばしば禁令を発した<sup>23)</sup>万能の「護符」の発行や「加持祈禱」に通じる要素もある。富士講のテキストの立場の講のためこれらを参考に視聴したいむきも多いと考え、先達の動きを中心に講行事について編集した。

●「武蔵野の富士講－丸嘉講武州田無組中里講社」(44分56秒)

大きな講のため先達・講元・その他世話人以外の一般の講員の存在が広くある。ムラ全員が講員という感覚に近く、山へ行かなくとも浅間神社のお札はもらうという人が多い。講と村組織は別なのだが、講のまつりの際も微妙に村組などが係わっている。講の活動は熱心な講元を中心に事務がおこなわれており、講組織についてイメージしやすく機能していた。なるべく素直にそれを生かすようにした。この丸嘉講に関して都が文化財としてとらえているのは中里富士と火の花まつりである。富士塚の草刈りや、正月の注連の化粧直し、義務としての東京都教育委員会との文化財関係事務など中里富士を中心に講が成立している部分も否めない。都に關係する博物館としてその部分は中心におさえた上で、その他に講がおこなっていることがらも紹介し、文化財も講行事のなかの一つとして見てもらうようにした。

●「江戸川区の富士講－割菱八行講」(43分30秒)

江戸川区内にはボク石をふんだんにもちいた富士塚がたくさん残っている。八行講の塚修理や7月1日の江戸川区、浦安市を中心としたナナセンゲンマイリの機会に各塚を紹介している。この講は富士登山はおこなわない。3年積立で富士吉田市の火祭り参詣をしていることから夏の行事としてはそれを中心にした。講の行事は前者2講と比しておとなしく淡々としている。

表 6 編集内容(事例・資料)概略

「富士信仰と富士講」	「武蔵野の富士講」
<ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山遠景全景、山の中腹の様子</li> <li>・東京の富士塚</li> <li>・富士塚分布図</li> <li>・講の盛んな時分の登山の様子(昭和写真)</li>   <li>・丸藤宮元講の組織 先達、講元、世話人(月拝み)</li> <li>・先達の存在(マジカルな面など)「焚き符」の話 ムシヨケの呪い 講員への守り施 立ち拝みの護摩きよめ 行衣の版木刷り わらじかけの登山</li> <li>・富士講の成り立ちまでの歴史 角行、身祿(各座像、角行図、富士山絵図、人穴、お添え書き等、身祿墓)、高田藤四郎(胎内像、高田富士写真・江戸名所図会)の流れ 富士講の弾圧政策について(禁令) 登山の形態の変化について(女人天上)</li> <li>・講の1年の活動(山開きを始まるの目安とした1989~1990年) 6月30日 北口本宮富士浅間神社開山前夜祭、先達の参加御師、山小屋への奉納(御師の存在) 7月1日 ナナフシマイ 富士塚をめぐる一連の講の動き オツタエ、各塚、講のもてなし、マネギや大マネギなどの使われている奉納物の様子、駒込神社麦藁蛇と使われ方</li> <li>登山前の会計(月掛けの廃止)、世話人旅程の相談</li> <li>8月2日 立ち拝み(オツタエ、安全祈願、荷物のきよめ、初登山者への注意)、木花咲耶姫像・先代先達山行きの準備</li> <li>8月4日 先達バスに切火、バスの旅程、講の衣裳の区別(今は手拭い)</li> <li>登山 御師宅到着(カケネンプツ、おめでとう、木花咲耶姫像のあつかい、身支度) 富士浅間神社参拝(マネギ奉納、安全祈願、先代先達像に手拭い奉納、登山道起点、オツタエ) 5合目(バス旅程、小御嶽神社休憩、強力)歩行登山・休憩の様子、行程途中の山小屋とのやりとり、杖の焼き印、登り方 元祖室(鳥帽子岩・身祿入定地)の講の宿泊休憩の様子</li> <li>8月5日 ご来光拝み(オツタエ) 火口拝み(オツタエ)、オハチマーリ、下山道を使った下山 下山祝い酒宴、御札</li> <li>8月10日 お礼拝み オツタエ</li> <li>8月26日 富士吉田の火祭り(山じまい)への参加(祭礼の様子、講のタイマツ拝み) 火伏せのオキ拾い</li> <li>8月27日 オキのあつかい</li> <li>2月3日 富士吉田市北口本宮富士浅間神社節分祭への講の参加 (一番に豆をまく、世話人の家族が多く参加する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・富士山遠景全景</li> <li>・中里富士(富士塚の形態の特徴、中里富士の特徴)</li>   <li>・講の組織 先達、講元、副先達</li>   <li>・中里講の成り立ち 角行一身祿—江戸八百八講—農村部の丸嘉講のひろがり(近江屋嘉右衛門—善行道山)、田無組の現構成</li>   <li>・講の1年の活動(山開きを目安とした1989~1990年) 農閑期 オツタエの月読み講(1990年) 1989年 7月6日 平成1年記念 丸嘉講の太々神楽奉納(記念額奉納の手順、神楽奉納、講の神楽奉納の歴史、御師宅直会)</li> <li>6月30日 講、北口本宮富士浅間神社開山前夜祭参加(神楽)</li> <li>7月24日 中里富士参拝、ゴゼンサマの山行き、バスの旅程・登山の変化</li> <li>登山 浅間神社参拝、朱印、5合目からの歩行登山、山の登り方 鳥居荘宿泊、休憩の様子</li> <li>7月25日 夜行登山、ご来光拝み、火口の拝み(オツタエ)、ゴゼンサマへ賽銭</li> <li>8月26日 富士吉田の火祭り(山じまい)への参加(御師宿泊、火祭りへの奉納、タイマツ見物)</li> <li>9月1日 火の花まつりの一連— ヤドでの清めから準備(クシ・絵ドーロー・タイマツ・ヘイソク、ろうそく) 山への登山、山頂拝み(オツタエ)、近隣の参拝の様子、下山、そうそくの御利益) タイマツ拝みの所作、灰の利用 直会、うどん</li> <li>12月22日 星祭り(御札づくり、星祭りの拝み)</li> <li>12月30日 講の塚の飾りつけ</li> </ul>

「江戸川区の富士講」

- ・富士山遠景（旧江戸川から）
- ・江戸川区周辺の富士塚（今井、猫実、中割、堀江、下鎌田）
- ・下鎌田富士（ボク石、富士塚の特徴）
  
- ・割菱八行講由来（伝承＝先達談話）
- ・講の組織
- ・講の過去の行事 登山古写真
  
- ・講の1年の活動（山開きを目安として1990～1991年）
  - 6月23日 オヒナミ祭（ヤドの準備：祭具の巡回、料理の用意、畑からの材料の調達、祭具・ゴゼンサマ個々の詳細、襖ぎ、オヒナミの装束・着方、オツタエ、直会、ナナセンゲンマイリの打合せ）
  - 7月1日 山開きとナナセンゲンマイリの一連（塚の山開き準備、土地の季節の供え物、オツタエ、塚の参り方、他の講とのつきあい、マネキ、篠崎浅間神社幟祭り、屋敷内の新しい富士塚）
  - 8月26日 富士吉田の火祭り参詣（講掛け金の一巡、講の格好＝現代のツアーと同じ、バスの旅程、北口本宮富士浅間神社参拝・お札、小御嶽神社参拝、タイマツ見物の先達の引率、オキ拾い）
  - 8月27日 オキの処置  
次の月がけ・手拭いとマネキの相談
  - 11月22日 先達お札作り
  - 1月4日 講の春祈禱（装束、祈禱のオツタエ、お札の配付、集金、世話人の正月の床、祈禱者のもてなし）

が、この講の火祭りのみ参詣という講の一巡の仕方は現在の多くの富士講<sup>24)</sup>の姿である。

## 5. 問題点と課題

富士講の撮影は、当館にとって初めての東京都以外の場所の登山行為などを含めた地域、期間ともに大規模な撮影であった。1989年度は予算的に館の収録対象の数が非常に増加した年でもあり、それまでの文化財保護行政宛連絡事務の視点が欠如していた点などを整備する作業をおこないながらの初仕事というだけでもまごついた記憶がある。都生活文化局などが文化財の事務連絡に不慣れだったため、私たちの側で様式の説明や理解をうるまで非常に時間がかかったのである。現時点でも正確に理解されているとは思えない部分が多く残念であるが、それ以外の点で大きな問題点と感じた点について考える。あらためて記すまでもない当たり前のことで当館だけで実行していないものもあるし、このような作業をおこなう博物館全体に共通の部分も含まれている。

### (1)撮影形式の選択について

撮影の形には下記3つがある。

- ①現地調査後の撮影
- ②調査並行の撮影
- ③メモ撮影（まず撮影する）

どれを選択するかは基本的には各自の自由である。富士講他1993年まで館が採用してきた方法は②が主流であった。記録の緊急性という点でこの形式は有効なのだが、撮影規模を大きくとらざるをえない対象をあつかう場合や予算規模が大きい場合には当然①の形式か、もしくは館側の現場担当者を増やすことが望ましい。後者に関してはその中での中心担当の検討を要するものだが、とくに富士講の富士登山においては後者の措置が必要であった。

いうまでもなく、現地での学芸員の仕事は、収録スタッフ、収録対象、その他の現場同席者（教育委員会事務担当者、その他放送局や調査者などギャラリー）の調査・観察、調整、指示、挨拶等々多岐にわたる。なかでも対象が1名ではなく集団となると行事の進捗予定や力関係の把握など触覚を複雑にはらねばならない場合が多い。その上作業はすべて現場主義である。このような前提条件となるので、調査並行の場合は対象とまだこちらも懇意でない分いっそう配慮が必要であるし、懇意でない対象とプロスタッフの関係にはなおさらナーバスにならざるをえないこともある。対象にとってプロスタッフは「権威」なので、それがメリットとなることもあるのだが、ともするとスタッフの不用意な一言で行事の在り様自体が崩れてしまったり、

どうしても波長があわないケースがあり気は抜けない。緊急な現場主義での調整がとれる態勢が必要である。調査並行の撮影では撮影予定の変更頻度がどうしても高くなるため、館側の迅速な指示は不可欠なのである。

各講の個別の記録概要、複数年度にわたる登山の収録や編集については機会をあらためてきちんと報告したい。が、事例をあげてみると、1989年の宮元講の登山の際はカメラマンのポイントの見落としと脚の故障からスタッフの下山行程と撮影区間の分掌に大きな変更が生じた。このため下山時私は講の行程を一時離れてカメラとともに別行動をとらなくてはならない区間が生じ、この間の講側の様子は休暇で講に参加し登山に同行していた他の学芸員たちの報告の限りとなった。登山中のカメラも見ながらの少人数での並行調査は非常に困難なものである。しかし、規模の大きい収録はしばしば実施できるものではないので、体制の不備からデータ整備ができなくなる事態は避けるべきである。とくに長年候補としてあがっていた「富士講」の記録収録の内容は、詳細調査を欠いていたけれども核として「富士登山」を眼中においてあげられていたのは確かなため残念な点である。今後の収録実施には、この点に留意して撮影形式を選択する必要がある。少なくとも行き当たりばったりで②を選択する事態は避け、その形式を選んだ有効性を最大限引き出すべきだろう。②形式で実施の際のあまり「仕込み」のないメリットとして、現場のインタビューなどを盛り込んだ箇所もあるが、なかなか現場での気ぜわしさが気になりうまく実行できなかった。

## (2)指定文化財収録の意義

民俗文化はたえず変化していくものであり、この意味で埋蔵文化財保護法のような法規が成立するものではない。指定文化財としてある程度固定化とまでいかずとも制約を受けた対象を記録収録する必要や意味があるのだろうか。とくに当館は東京都の文化財保護の領分が掌握している博物館ではない。にもかかわらず、館の収録候補としていくつかの指定物件があげられてきた。丸嘉講社の収録予定項目検討の際、登山は大変なので都指定の火の花まつりだけでよいのではないか—という意見もあった。この意見には講のまつりにも大小あり、それをとらえるのに一番大きな祭礼日やせいぜい祭礼の準備やあとかたづけだけを眺めても本当の意味はわからないという点でも反対である。が、ここでは事務的な領分から述べてみる。

当館は東京都が出資の博物館のためある程度都指定には気を配る必要がある。ただし、視点は異なるかも知れないのだが、都教育委員会でも文化課が担当して無形民俗文化財指定などの指定物件に関してのフィルム撮影作業を継続的に続けている。館が不定期でおこなっている収録対象検討会議での文化課学芸員との調整などで、過去においては教育委員会での撮影が遅れている若い指定分野（風俗慣習）や彼らの撮影から時間がたっている島の民俗芸能に関してとりあげてきた。が、民俗芸能のとらえかた等の議論のなかで指定範疇の再検討作業の動きの話も聞かれ、島しょ部の民俗芸能の撮影が都教委でも再開されるものもある。単に指定のブラン

ドとしての選択だけでは今後館の意思を問われるものとなると思う。いずれにせよ、「指定資料の指定の視点のままの撮影」は一当館のように収録時と編集時で学芸員の担当替えが頻繁におこなわれ、結果、すでに用意されていた画像と現実の場の比較調査もなしに後任がまとめていくケースすらある場合には、やりやすく見え歓迎されるかもしれないが一般的には意義が薄くなってきた情勢にある。純粋な指定事由にあるようなただカメラをまわしていればいいものが撮れる環境に囲まれた時代は終わったと考えるべきである。館でもこの努力は以前から怠っているわけではないが、安易に権威に飛びつくことなく当館<sup>25)</sup>だから制約にとらわれずにあつかえる対象をとりあげるいっそうの努力が必要である。富士講はその意味では、宗教的で不適との判断が行政から下りがちの過去の経緯があり、このため講や塚、身祿の墓等指定や把握がゆるやかに進んだものもあり、映像記録化の率が低かった。あつかう意義は大きかった。

### (3)映像記録の資料論

映像や音声資料はある媒体に固定された二次資料でありデータ資料である。事象からある視点をもって切りとってきたものである。これを博物館の資料といえるかどうかという点は、資料の性格だけではなく資料という語彙自体の定義や分析の目的を含めて議論しないとさまざまな論者の討議はかみ合わないと思われる。たとえば、編集物は確かに視点や目的を持った「作品」であるが、思考を経た視点の媒体固定という点では〔村上1992 p.32~33、p.157~158〕にあるように文書資料も二次資料である。また、映像のなかでも静止画と動画、動画のなかでは媒体固定の程度や方法によって資料認識が異なるケースもあり曖昧な性格を持っている。個人的には、このような資料は「論文」とその「素材データ」として業務的裏方にストックされるのではなく、媒体の増加や発達とともに博物館において「蓄積されていく資料」としてのあつかいは定着するのではないかと感じている。なぜならば、当該データは文字記述と同じく視点をもって切りとられたものであるが、文字論文等と異なり視覚や聴覚に直接うたえる性質のものだからである。視覚的という意味では有形資料と同様である。また、歴史系博物館では「映像資料(イメージ)」の範疇と錦絵などの絵画資料を資料単体としては分化してとらえているケースが多いと思われるが、「概念や文化表象などのあるファクターを通した図像化の是非論」では絵画資料も当然同様な問題点をはらんでいるはずである。にもかかわらずこの視座からの「資料価値」の面であまり否定的に問題にされないのは、動画や音声資料に比して、現実再現性や受け手の投射性等の広がり<sup>26)</sup>の質が異なってくる(鈍い?)からであろう。これらの仕掛け効果と媒体固定という形の組み合わせの程度によって「是非論」が消滅していいはずがない。このため、少なくともファクターの有無と受け手の反応を無意識に同じ俎上に置いて定義された「博物館の他資料」と比べた優劣論や格づけは意味がないと考えている。—この点については美学美術史の分野では日常茶飯議論されているのだろうが、私のごく周辺では体制的に資料の収集と展示の作業が分化されているためか、単に資料単体の比較からは「映像の事実」がマイナス的



にとらえられがちな一方、実際の展示の場では絵画や写真のイメージのなかの江戸・東京が積極的に提示されていた。その相互の主張の比較や各イメージのコンテンツを整理した資料論や動きはなかったと記憶している。

しかし、当館は既に標本・図書・映像音響資料という物に着目した分類を採用しているため館のコレクションとして蓄積されていくのは必然である。その際、どんな点に注意を払うべきであろうか？

いうまでもなく、資料というのは付随する情報があるから資料なのであって、いかに豪華な着物でもよってきた情報がなければその価値は半減する。同じ器が欠けているよりも完形のほうが好ましいのは、完形で美しいからではなく、完形ということからその物の全体の模様や形や各部位の材質、その物の持つ機能などを他者に伝える情報量が多いからである。くりかえすまでもないが、映像記録の場合も当然その原則に立ちかえるべきである。とくに、新規の収録ということで当然動機を持って写されたと考えられる資料に関しては、写されている対象についてのデータや撮影時の対象と撮影方法に関するデータなどが残されていないものは、それらをもとにした当該映像の検証作業が不可能という意味でいかに予算をかけた撮影であったとしても博物館資料としては不適格である。後日他者がその映像をあつかう場合に切りとられた映像のどの部分が再現なのか、どの部分が対象があがって間違えたのか、この時悪天候のために非常にイレギュラーな行事展開になっていたのか、別の解釈を施すべき（施せる）行為なのか判断ができないからである。

このことから、撮影時の並行調査はいずれの場合でも不可欠である。それは一館でよくいわれていた一単に、撮影スタッフに館の意向についての訓練がなされていないからではなく、地元の教育委員会への礼儀一からでもなく、現場が楽しいからでもない。ましてや、大規模な博物館は現地とワン・クッションあるためその知名度でことが進みやすいメリットがあり、館としての役割が当館は他館とは異なるという意見もあるためか、「なにも区市町村の博物館や文化財係のようなやり方でやる必要はない」という一大規模館の立場や内部機能を拡大解釈した意見<sup>26)</sup>などは論外である。「資料候補」の資料化のための手順や体制や必要データが館の規模によって極端に異なるはずがない。

埋蔵文化財では発掘してからの調査報告書の作成までが担当者の義務であり権利であるという発想があるという。掘り出した時点での状況を担当者が一番把握しているという判断からである。都市化などにもない、従来「市井から発掘される」一番の候補であった有形の民俗資料の定義がファジーになっている点や、物はあっても情報が採集しにくくなっている趨勢から見て、収集時の担当者（情報把握者）の収集視点や情報採取方法は今まで以上に意味を持ってくると考えられる。つまり、埋蔵文化財以外の有形資料に関しても今後、埋蔵文化財同様のセオリーが徹底されていくべき思う。そして、二次的資料という点で映像資料は物体としての「もの」資料とは異なる形のストレートな「情報」をその「もの」のなかに内蔵しているため少し

ややこしいのだが、切りとるという形で発掘してきているということから同様な対処が望まれるものである。つまり、丸嘉講社の例のように編集時に安易に担当をかえるべきではない。私は同様な富士講に関して多少あつかってきたし、丸嘉講についての行事を継続して収録時やそれ以降補助的に実見する機会は持っていた。それでも非常にあつかいづらかった。同姓者の多いムラ社会の映像のなかの個体の識別—という初歩の初歩にすら手間取った（実際、その時点で与えられたデータと画像だけでは「識別できなかった」）。効率面だけでも大きなロスであった。

検証データの整備と一義的な意味合いが強い編集報告は権利とまでの自己主張をしなくとも明らかに記録収録を担当した者の資料的義務の範疇である。義務放棄する程度の情報しか初期段階でとれていない場合は話は別だが、その場合はそのような収録があること自体が問題だろう。その上で、カメラがない環境での対象のあり方との比較や、データを持った第三者の検証が必要なのである。

#### (4) 音声資料について

##### ① 声や会話

記録収録では音と画がともにあったほうが記録として望ましいことからすべてビデオ収録を主体としておこなってきた。ビデオというどうしても画像が中心であり、記録のアドレスシートも画を基準にとられている。

記録映像を見ていて残念だったのは対象各自のふとした言葉がうまく拾えていない点である。宮元講の登山の前の打合せでも中心的な先達の話はワイヤレスマイクを通したり音声担当が配慮してブームを振りやすいのでタイムリーに拾えるが、複数名の意見討議などでは、講に対する意識の参考となる発言がかなりあっても小声でしか入っておらず、音の調整を努めても作品の音声としてうまく利用できなかつたり、聴きなおそうと努力しても何をいっているのか詳細がわからないことがあった。これは富士講以外の記録でも総じて同様である。音声担当の増員など技術面のみとらえた解決策はあるのだが、現場の状況と技術が合致しない場合が多い。それがために観察調査が必要といえるのだが、いつも残念に感じる点である。

##### ② オツタエの収録

オツタエ唱和が講の集いの契機になっており、各講オツタエの文言は殆ど同じであるにもかかわらず、節がまったく異なることなどから3講のオツタエをすべてビデオ収録した。アドレス採りは画像主体となるのでこれについてはオリジナルの資料としての採譜資料を作成した<sup>28)</sup>。途中でテープチェンジをせねばならずオツタエの繰り返しの部分で替えてもらうようにした。が、完璧に実行できたとはいえ、流れの中でどうしてもテープ替えの間ができてしまうのはビデオの欠点である。複数台のカメラの投入はオツタエについてはできなかった。

現在館内に音声資料主体の公開設備がないためこれらの音資料の公開はペンディングとなっ

ている。所蔵資料をかんがみた設備と方法の検討は機器のリニューアルをにらんで是非おこなう必要がある。

#### (5)編集の時間に関して

編集資料の使用目的と時間の検討が順調に進まなかったため、記録事業分の編集は「視点を持って収録した際の対象の全容がうかがい知れる長さ」ということでとくに定めていない。使用するLDと装着方式の時間限界から60分という物理的制約があるが、対象により10分～45分程度の範疇でバラつきがある。

1991年から開始した編集作業の時間策定時、管見の限りでは、簡略に見せるものや流動的な観客に見せる場合をのぞいての教育普及のための教材作品としての文化財映像の時間配分として、30分以内と45分以内の2段階が見受けられた。作品と時間からの分析は製作プロダクション側でも経験則<sup>29)</sup>の蓄積がある。博物館で使用する映像では、5分以内、30分以内、無制限の3ランクに大別でき、人の集中力や視聴形態から算出しているようである。「以内」のなかでの時間算出は収録内容と視聴設備・形態によっているようである。

30分以上60分以下というのは、視聴の経験からも非常に中途半端な時間であることは承知しており編集の際担当者間でいつも議論となった。もちろんそれでちょうど良い対象もあったので、ここで述べているのは45分では短かった場合それを削ると「嘘」の提示になるのではないかという立場と、見てもらわなければ動機づけにならないという立場である。切りとられた二次資料という虚偽性や博物館の展示学のみとらえれば何をいまさらという問題かも知れないが、現場で非常に緊張しておこなわれている儀礼を簡略に編集し楽しく明るいテンポのBGMが施され、いかにも「アレンジ」で見せてますーという作品を目にすることもあり、この点は記録事業面では一考すべき問題点<sup>30)</sup>という意見は共通のものだった。実際、丸嘉講の1989年の仮編集の際、試案として一般的な30分の形式で丸嘉講の一連の動きをまとめてみたところ、TVでよく見る「旅紀行もの」風の、いかにも「手軽なダイジェスト」という作品になってしまった。これなら他所でもやっている（なにも博物館で見なくても他にもっと良い作品がある）という感想で、製作スタッフ側でも作ってみて非常に戸惑うものだったため編集しなおしたという話を前任者から聞いた。どこに違和感があったかということ、田舎講社の丸嘉講ののんびりした雰囲気<sup>31)</sup>が30分のなかでは表れず、1年という比較的長い期間、機会があるごと同席収録した者にとって、違う顔を持つせかせかせかした講が出現してしまったということだそうである。当館以外の作品で45分前後でまとめられた作品も総じて収録期間が1年あまりにおよんでおり、収録日数など量的結果等の算出から45分に落ちついているようだった。また、館内では45分で足りない感のある対象で編集視点の変更が望ましくないものに関して60分ではいけないかという議論が常にあり、60分＝1時間では単位が一つ違ってくるという印象からその時点での決断はおこなわなかった。しかしこの点は、作品の公開のみ担当する立場だった者が収録編集する立場にかわる

と、以前の主義主張を翻すことが多々あったことから、自らの制作・視聴・公開作業の実経験（事実）の積み重ねから結論を導き出す姿勢が肝要と感じる。私は「視聴率」と「時間」の枠組みよりも、「内容」と「視聴設備・形態」を重視すべきと考える。

上記に関連して富士講作品の感想を述べると、教材要素はクリアしたが、反面、講の在り様というと明らかに現場の雰囲気のごく一部の断片である。宗教法人とは異なる素人の講運営のため、もっと悠長な存在なのだが一くりかえしのオツタエの拝みや見慣れない装束集団の姿の印象の強さが残る（ことに富士講の異形のいでたちやお焚き上げは、神楽や職人などと違って見慣れないという意味で強い印象がある）。月拝みなどの最中は確かにいつも整然と真面目におこなっている。熟練者のオツタエはきわめて流暢だし、日が浅い講員はそれこそ必死に帳面をにらんでお稽古している（この点では、編集作品の伝えるイメージは「非現実」であっても「反現実」ではない）。そのような雰囲気の様子が事例として多いとどうしても現場で見るより真面目な厳しい信仰のイメージが生じてしまう。息が抜けないのである。

編集時のアンケートでも館職員から「構成からは必要なのだと思うがお焚き上げ（オツタエ）の場面が多すぎる」、つまり、各行事の提示よりももう少し周辺部分を入れて気が抜けないかーといった声があった。換言すれば、無理ならば一挙に割愛せよという意見である。実際、幕府の役人がさぞかし恐怖・弾圧するだろうという雰囲気での厳しいだけの集まりには私の見てきた講の人達は参加しようもない。お焚き上げ前の悠長な会話や、文句をいいながらも集まっている様子など、もっと含めていけばそのことはよくわかるのだけれども今回の時間・撮影条件では限界があり結局解決しないままに提示した。

記録素材の活用や内容理解の援助の形として、同視点の長・中・短プログラムの対処を実施するのは決して珍しい方法ではない。また、館の素材収蔵の意図から「富士講の富士登山」「先達の地鎮祭」など個別にバラした編集への若干の対応も想定し記録していつている。実際、ここ5、6年の間にやめた行事など再度の収録不可能な内容も生じている。資料を死蔵せずそのような編集も引き続きおこなっていければ富士講についてより豊かに紹介していけると思う。これは、開館前は「シリーズ的作品はバラエティに欠けることから都民サービスに反する」との意見があり実施できなかった。また、同対象から複数の作品を抽出することに関して、視点を満たした画像のつながりで難点があるという分析的な意見ではなしに、「（館内では）予算規模が小さな当該業務で複数作品抽出が可能ということ＝個々の作業予算が少ない＝作業量が少ない」という、予算規模を中心とした意見に陥りがちで従事員数が減らされる危険性があったため、政治的に積極的な実施は見送った苦々しいいきさつがある。このような体制面の問題も含めて、資料の適正な資料化を確保するための仕事論理についての無理解や予算規模と作業量の混同議論がある限り、周辺環境の厳しい変化のなかで、よい内容の記録は撮れないし、サービス面を真にクリアする編集もむずかしいと思われる。

## 6. おわりに

現在、富士講の各編集資料は館内で公開している。交通史や宗教学などから講をとりあげている学生などから飽きもせず3作続けて見たというような話を聞く時もある。現場ではもはや見られないものもあるため参考になっている様子なのは何よりである。

しかし、資料化の上で諸々残念な面はあったがここで断っておきたいのは、本稿は事務局としての体制の批判を目的としたものではない。あくまで、フィールドにある文化表象をとらえ資料化し、博物館で活用していくにあたってどうあるべきか自らの作業を通じて考えた過程の一記述である。なにも映像だけではなく、当館で「生活民俗資料」と称しあつかっている、有形の民俗資料に加えた文献史料以外の歴史資料等を総括した資料も同様である。フィールドから切りとられる時点で生資料のあつかいとしてどのような配慮が積み重ねられているか—なかには断片的（物質的断片ではない）な収集にならざるをえないケースは多いと思われる。当館の体制ではむずかしいのかも知れないが、どの館でも業務の煩雑さがあって等しくむずかしい状況は存在し、資料の定義も曖昧な情勢がある。が、そのようななかでも、コアとなる情報を持つ収集に努める姿勢は、いかなる展示をおこなおうとも、「地域」からの資料を集めるという意味で不可欠なものではないだろうか。（1995年2月稿了）

### [註]

- 1) 富士講の本尊。講によってはゴゼンサマ（御前様）と呼んでいる。吊し拝むため軸形である。
- 2) 享保17年の飢饉と幕府の米価政策の失敗からの米価高騰など政治腐敗に関して身禄が入定前の著「お添書の巻」において厳しく批判していることは各研究者が指摘するところである。
- 3) 複数ある富士登山口のうち現山梨県富士吉田市の登山口。ここからの登山を「北口登山」といい、江戸の講は北口登山が中心である。
- 4) 岩科小一郎氏に1989年、話を聞いた際、「もちろん、寝たきりの者は初めから連れていけないが、多少体に故障がある者や、年寄り・女子供を無事に上まで連れていく点に意味があって—」という見解があった。まさにその類の配慮で、宮元講の登山は2分歩いては2分休みというペース（筆者調査による）で山頂を目指す。
- 5) 夏山シーズンには富士山をはじめとした登山に関する記事が目につく。『朝日新聞』声欄では、1994年8月5日掲載の「富士の山小屋もっと清潔に」の投書を皮切りに、賛成論・反対（ぜいたく）論の投稿があった。ぜいたくという見解を示す者は「山小屋は緊急避難所」「高所の自然環境のなかで下界と同じ快適さを求めるのは無理」という観点からの意見であって、「信仰のお山」という視点はない。（『朝日新聞』1994年8月5日、10日、18日、22日、25日、26日、30日、31日）
- 6) シーズンの休日前はまさに「富士山銀座」の様相であり、さまざまな登山集団に出会う。ツアー客、子供会、商工会議所のレクなど、「老若男女」の富士詣である。
- 7) （註4参照）また、確か私が登って3年目頃から山小屋のトイレに夜間電灯がつくようになったが、それまでは真っ暗だった。世話人は慣れない講員が夜中トイレに起きた時の案内のため、交代でイロリ端で寝ずの晩をしていた。
- 8) 〔岩科1983 p.274~288〕には、「富士講は単なる富士山に登る講ではなく、講祖身禄以来の伝統ある庶民済度（中略）が眼目であるから、講の代表者たる“先達”は、あらたかびと的な立場を

確保できる験があり、諸人の人望を集める人でないと講員はついてこない。(中略)先達は講員のなかに没入して、なにかとめんどろをみ、話し相手になる慕われる人が望ましい」とある。また、江戸川区の割菱八行講先達の談話では、経費的に持ち出しをしないとイケないこともあるので、かなりの土地持ちでないと先達はできなかったという。

- 9) 候補としてあげるにあたっての参考来訪は実施しており、お焚き上げ行事や吉田祭りを楽しみ的に職員が撮ったベータビデオなどがフィールドからの直接の参考資料として存在した。
- 10) 予算的に数の多い複数は無理だった。また、館の記録の優先度が「記録の緊急性」ということで、(表現は的確でないが) 伝承内容の変化の速さや消滅度を基準にしていた。このため、なるべく「講としての動き」ととどめているものが望ましかった。
- 11) 富士講の経典。身祿の道徳的教えがわかりやすく書かれている。
- 12) 天保年間(1830~1844)に行徳の割菱八行講から分岐したといわれる。1842年の富士講曼陀羅には、江戸市中から離れているせいか見当たらない。
- 13) 割菱八行講を下鎌田割菱八行講、今井割菱八行講を上今井割菱八行講ともいう。
- 14) スタッフ名のうち( )のないものがメイン・スタッフ。( )内は登山時の複数員数、ごくごくイレギュラーな収録日の担当である。
- 15) 本稿執筆中には、まだ刊行されていないが、様式や手順の詳細は『日本民俗学』201号を参照のこと。
- 16) このことに関しては、1989年度に記録収録事業が映像公開の情報システム部門から分岐してからはほとんど討議できなかった。教育普及の目的と意義、そこから算出される一収録対象からの作品本数とそれぞれの時間などについての中身のある議論調整は、その後結成された映像ライブラリーのプロジェクトチームでも未着手のまま解散したため結論が欠けていた。このため、都教育委員会の教育普及映画や文化庁補助金事業による記録映画の時間数を参考に30~45分位まで可という形で設定した。
- 17) 講の運営が男性の世話人中心におこなわれていたため、収録時どうしても男性の世話人側について調整、観察する形となっていた。人数としては互角な女性の世話人に身近について登山できたのは有意義だった。
- 18) (註4参照)
- 19) 収録終了後から編集予算のついた1992年前までの動きは不明点があり拾っていない。表化した範疇には業務外のものも極力含めた。
- 20) 先細りの自覚があるため、大概の場合、むしろ「自分たちの姿を撮っておいて欲しい」「知っていることは伝達したい」という発言が聞かれきわめて協力的だった。また、丸嘉講の場合は都無形民俗文化財指定の行事保持団体のため当館が撮りに来ること自体「ありうること」で不自然でないという意識があった。
- 21) せっかくカメラが来ているので、講の参加人数やお札の数など豪勢におこないたいというものや、行事を正調・文化財として復古調でおこなわねばという意識を垣間見る時がある。それらはお断りした。一方、私の側では、とくに都指定に関して収録する際、明らかに補助金をもらっているため協力は止むをえない、誠心誠意協力したいという好意に接することがある。補助金を出しているのは東京都教育庁である。同じ東京都といってしまうとそれまでだが、きちんと収集し資料化することにより保護政策に対する貢献や提言をしようという姿勢を当館がとっているとせず、個人的誠意ではなく体制として撮ることにより何らか彼らに還元できる体制にあるかという職務上の疑問が常に脳裏をかすめた。つまり、ポジティブな動機はない館のありかたと自分の立場の不快さを強く意識した。この状況での収録は文化財の疲弊に通じるものであり、収録事業はやめたほうがよいのではないかと感じることもしばしばあった。そのため、申し訳ないという感情が生じたわけである。

これは、同様に二次資料である複製資料として展示予定が曖昧な指定物件をあつかう際、指定

- 物をあつかう無難さを「江戸博で文化財を立体記録保存する」というキャッチフレーズに安易に置き換えて実施していた時期があったと記憶している。それこそ文化財保護の領分の仕事なので、視点の未構築のすりかえという意味でおこがましい発言と感じた不快感に通じるものである。
- 22) 毎月の拝みは、まだオツタエを覚えていない新しい世話人にとって、その文言や節を覚えるまきにお稽古の機会である。オツタエには、孝や日常の勤勉など現在の実生活にも普遍性を持つ文言があり、人の道徳心などにうったえる布教の様子がうかがえる。身禄のきわめて現実的な教理である。あわせてその他到底理解不可能な文言もひたすら唱和する。覚え唱和する行為が得心に通じると思われる。が、もとより当初そんな気持ちは少ないかも知れないが、新参者はテープレコーダー持参で真剣で、大体2、3年で皆と一緒に帳面を見れば唱えられるようになる。
- 23) 国立公文書館内閣文庫所蔵の『憲法類集』嘉永2年9月8日の禁令では、俗人の身での「行衣ヲ着し鈴ヲ持異形ニ而登山」「如何敷唱事」「加持祈禱紛敷儀致護符様之物差出儀」など、現在と同様の行為についての禁止事項がある。
- 24) 講が解散してしまっても閉山の吉田火祭りだけは訪れる富士講経験者、講は多い。きつい登山より遊山が選択されていく形である。
- 25) (自分でカメラをまわしてしまえばそれまでだが) 指定文化財以外には動きがとれない部署もある。この点については〔友野1994 p.15〕にも記した。  
一方、館では調査データや解釈基準が整っているのが都指定の方が撮るのに手間がないという意見があった。しかし、各区市町村から推挙されて都指定へいたる調査基準は必ずしも収録の細項目の判断に足りるものばかりではない。指定時点での解釈と撮影時のギャップは大かれ少なかれ存在する。とくに私の側からは文化財保護行政の動向が見えにくいため、極端な場合、内容云々ではなくあつかうこと自体に大変な度胸や恐怖感がつきまとうことがあった。
- 26) 博物館の教育普及(機能)を司るのが学芸員という意見の一解釈から、「専門研究者や業者に調査(収集)、あるいは研究を任せ、その成果を吸い上げて研究や普及活動を学芸員はおこなうので、瑣末なフィールドに出る必要性は低い」という発想もあった。  
資料化のフィールドサイエンスが欠落した博物館機能論は、「瑣末さ」の内容を測れない。ただし、実作業の上ではむしろその点が肝要である。館や資料のおかれる状況は刻々と変化しているため、マニュアルの根本に何を置かかは重大な問題であろう。
- 27) 視点の継続という意味での編集は複数作ある場合がある。当館の場合収録量が多かったので複数可能なはずである。他者の目で見たと編集価値を否定するわけではないが、それは他者の検証のための材料提示までの作業がないところでおこなうべきではない。データ操作作業としていかにも不明朗であり、そのような編集資料が映像の持つ「事実」として博物館という施設で公開され権威を持つということは、望ましいことではないと感じる。
- 28) 採譜はすべて丸藤講はビデオからおこなった。丸嘉講はビデオと別収録の冬至のオツタエのカセットテープ、八行講はビデオ収録日に同時に録ったカセットテープから採譜した。採譜資料については『東京都江戸東京博物館研究報告』第2号に掲載予定。
- 29) 諸岡青人「民俗技術と映像記録についてのメモ」(1991年6月10日 日本民具学会研究会要旨)
- 30) 映像作品の傾向としてははさまざま存在すべきである。異なる発想からの叙情的環境映像作品を目標とすべき「作品」を別部門で担当した時には極力その方向で考えた。が、総じて映像の編集作業では一般啓蒙や視聴率という名目での時間や作品傾向の画一化と含まれる内容(画像やナレーション)の画一化が比例して表れてしまう場合が確かにある(そのほうが「短くまとめるのに」たやすい)。動機づけの成功の選択というより「送るメッセージ、視聴する作品はこうあるべき」という固定観念(=疑似環境の定型化)へと情報操作がおこなわれることのほうがより深刻な問題である。親しみやすさ・視覚的心地よさ、あるいは生涯学習・社会教育という名目下で、パターン化された作品しか見る機会がなくなりかねない博物館教育や視聴覚教育のありかたは望ましくない。

[参考・引用文献等]

- 青柳周一 1994 「富士講と交通－江戸の富士講を題材に－」『交通史研究』33号 交通史研究会  
『朝日新聞』声欄 1994 8月5日「富士の山小屋もっと清潔に」  
—— 1994 8月10日「富士の山小屋ぜいたく無理」「清潔と親切をスイスで体験」  
—— 1994 8月18日「安全な山旅で自然を楽しむ」「快適な山小屋中高年は熱望」  
—— 1994 8月22日「山小屋に快適求め過ぎでは」  
—— 1994 8月25日「富士山で盗難下界と同じか」  
—— 1994 8月26日「安易に登れば富士山は怖い」  
—— 1994 8月30日「進む自然破壊山行見直そう」  
—— 1994 8月31日「生徒に語れる3776メートル富士登山」  
岩科小一郎 1983 『富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰』名著出版  
大谷忠雄 1992 「丸藤宮元講社」『新宿区の民俗』(2)四谷地区篇 新宿区立新宿歴史博物館  
神奈川大学日本常民文化研究所編 1978 (1993復刻) 日本常民文化研究所報告第2集『富士講と富士塚－東京・神奈川－』平凡社  
—— 1979 (1993復刻) 日本常民文化研究所報告 第4集『富士講と富士塚－東京・埼玉・千葉・神奈川－』平凡社  
近藤耕人 1994 「映像と目とまなざし」『映像学』第53号 日本映像学会  
笹原亮二 1993 「民俗芸能大会というもの－演じる人々・観る人々－」『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房  
鈴木志郎康 1993 「事実と記録の神話－イメージから幻想へ」『映像学』第51号 日本映像学会  
裾野市立富士山資料館「裾野市立富士山資料館リーフレット」(発行年不明)  
高橋典子 1994 「集める－資料・作品の収集 民俗資料の収集」『美術館・博物館は「いま」 現場からの報告24編』日外アソシエーツ  
東京都江戸東京博物館企画・制作・監修 (LD/VTR) 1992 「江戸川区の富士講－割菱八行講」/同完成台本  
—— 1992 「富士信仰と富士講－丸藤宮元講社」/同完成台本  
—— 1992 「武蔵野の富士講－武州田無組中里講社」/同完成台本  
友野千鶴子 1994 「東京のラオヤの仕事とその周辺」『民具マンスリー』第27巻3号 神奈川大学日本常民文化研究所  
中野佳枝 1992 「丸藤宮元講社と四谷丸参伊藤講社」『新宿区の民俗』(2)四谷地区篇 新宿区立新宿歴史博物館  
長崎獅子舞調査会編 1991 『豊島区长崎獅子舞調査報告書』第2分冊 東京都豊島区教育委員会  
浜田晋介 1994 「集める－資料・作品の収集 考古資料の収集」『美術館・博物館は「いま」 現場からの報告24編』日外アソシエーツ  
平野榮次編 1987 民衆宗教史叢書 第16巻『富士浅間信仰』雄山閣  
宮田登編 1984 民衆宗教史叢書 第8巻『弥勒信仰』雄山閣  
宮田登 1975 『ミロク信仰の研究』新訂版 未来社  
宮田登 1989 『江戸の小さな神々』青土社  
村上義彦 1992 『博物館の歴史展示の実際』雄山閣  
諸岡青人 1991 「民俗技術の映像記録についてのメモ」(日本民具学会研究会要旨)  
山田尚彦 1994 「行政の調査者とフィールドのあいだ」松戸市立博物館調査報告書1『千葉県松戸市の三匹獅子舞』松戸市立博物館  
吉田直哉 1993 「報道の主観性」『映像学』第51号 日本映像学会